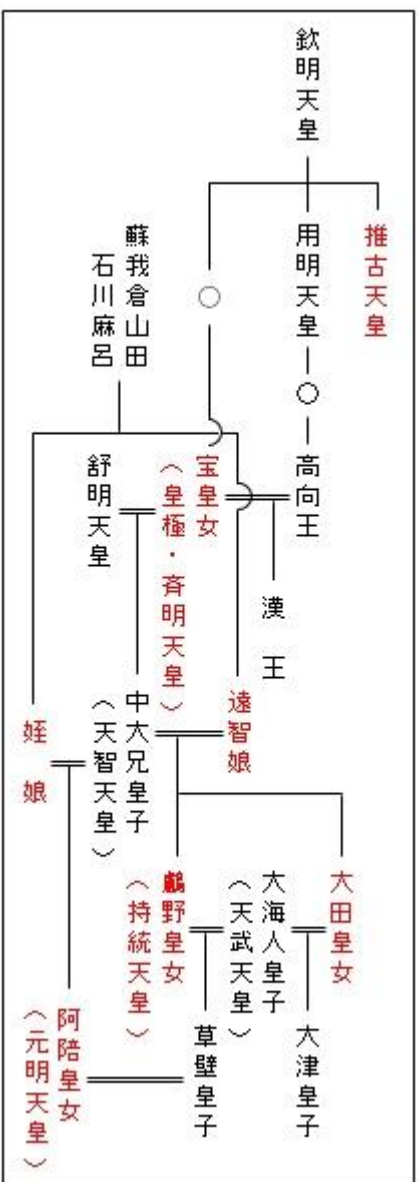


六六一年（斉明七年）一月六日、斉明天皇は百済救援の旗印を挙げる中大兄皇子の要請を受けて、難波津から一大船団を率いて筑紫嶋（九州）を目指した。

その二日後、船が大伯おおくに差し掛かった時に、大海人皇子（のちの天武天皇）の正妃だった大田皇女が第一皇女を生んだ。大伯おおくは現岡山県瀬戸内市沖で、その皇女は大伯皇女おおくのひめみこ（大来皇女）と呼ばれることになった。

そして、征西が行われた翌年の六六二年（天智元年）に、大田皇女の妹でやはり大海人皇子の妃になっていた鷓野讚良皇女うののさららのひめみこ（のちの持統天皇）が「生草壁皇子於大津宮」と記している（『紀』「持統紀」）。

また、大田皇女はその一年後に大田皇女は大津皇子をもうけている。そこで、国を挙げての征西には大海人皇子・大田皇女・鷓野讚良皇女も同行して筑紫に留まっていた、とするのが現在までの一般的な解釈である。



しかし、その通説には短絡的な面があると感じ、征西と「壬申の乱」に対する多様な疑問の再考を行ったところ、通説で説明し切れなかった結果が浮かび上がってきた。

(1) 草壁皇子と大津皇子の生地

当時、皇族の尊称に扶養氏族名や氏族名と直結した生育地の地名が冠せられたことは衆知の通りである。

それにもかかわらず現在の通説は、荒い書き方をすれば、「大津皇子は娜な（福岡県）の大津の宮で生まれたから大津皇子と呼ばれた。草壁皇子はその一年前に同じ宮で生まれていたが草壁になった」となるようである。

しかし、『紀』の記事から確定できるのは、大田皇女が征西に同行したことと草壁皇子が大津宮で生まれたことだけである。

それを拡大解釈して、大海人皇子と妃たちが征西に同行しなかったはずがないという先入観から、大津宮を「娜大津」にあつて斉明天皇が長津と改めた宮としながら、二人の皇子をそこで生まれたとしている。

草壁皇子はなぜ長津宮で生まれたと記されなかったのか、その理由を考えてみる必要がある。

娜大津は現那珂川の河口にあつて斉明天皇征西時の朝鮮半島への船団の基地になったことは『紀』が記している。蘇我馬子が始めた遣隋使やその子蝦夷が始めた遣唐使が母港にした現在の博多港で、『続日本紀』がいう「博多大津」（博多津）である。

これに対して、応神・仁徳大王の時代から単に「大津」と呼ばれていた港が別にある。

——そこは『万葉集』などで「御津」と記されることがある、難波宮の西側にあつた「難波大津」（難波津）である。近江の大津はまだ名前もない時代だったから、娜大津の「娜」は、先にあつた（難波）大津と識別するための記号だったと見なければならぬ。

また、「壬申の乱」に「大津道」の名称が出てくるが、これは現在の長尾街道で、推古朝に作られた摂津と葛城・斑鳩を結ぶ官道だった。つまり、大津道は畿内と難波大津を結ぶ主たる道だったからそう呼ばれたので、難波大津が単に大津と呼ばれていたことの証である。

従つて、ここで先ず、大津道の大津が難波大津であるのに、大津宮を娜大津宮とみなすことには無理がある、ということになる。

そして、その大津を見下ろす台地（大阪市中央区の上町大地）の上に、孝徳天皇が造宮して征西の九年前（652年）に完成した難波長柄豊崎宮なにわのながらとよさきのみやがあつた。

ここから、『紀』が記す「大津宮」はそこか、或いは近くにあつた中大兄皇子の大津宮ではなかったかと考えられる。

孝徳朝で東宮になった中大兄皇子が大海人皇子に下した二人の娘たちと大海人皇子の婚姻形態が不明だが、通い婚の形だったとすれば、草壁皇子はその大津宮にあつた鷗野讚良皇女の部屋で生まれて、大津皇子は大田皇女の部屋で生まれた、と考えられる。

草壁皇子を難波生まれとする推定に直結するのが、鷗野讚良皇女の養育地である。

その地理的環境を理解するために二枚の地図を掲げておく。

族に養育された可能性が考えられそうである。

そこが河内国草香邑（大阪府東大阪市日下町）で、神武東征の舞台になった「孔舎衙村」の比定地である。そして、そこを治めていたのが新羅系の草壁（草香、草香部、日下部）氏で、彼らには草壁吉士の姓が与えられていた。

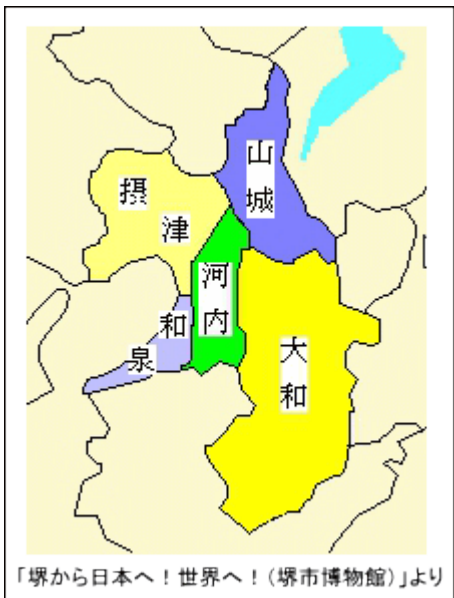
これに対して、大田皇女と大津皇子が育った場所は不明だが、『播磨風土記』を参考に



### 5世紀以降

仁徳期の治水事業により、河内湖の水域が減少するとともに、流入している大和川枝川等が河口に三角州をつくります。そして湿地・草原あるいは堤防敷となり、その後、河内低地の陸地化が始まります。

「水都大阪＞古代大阪の変遷」より



上図①は奈良時代頃の国の領域で、それ以前の河内国は摂津国に接する和泉国の北部から大阪湾に及ぶ地域までを含む、蘇我氏の勢力圏だった。

左図②はそれ以前、孝徳期あたりの大坂湾の地形図で、草香江の北東部が更荒郡で、その中に鷓鴣野邑（現大阪府四條畷市岡山あたり）があった。そして、鷓

野讚良皇女はその地域の豪族だった新羅系の宇努連に預けられて、養育されたとみられているのである。

持統天皇の名称は豪族名に由来する地域名が詳しくつけられた珍しい例だが、草香江の奥には草香津があり、その東部、つまり鷓鴣野邑のすぐ南側にも新羅系渡来人と末裔たちが多く住んでいた。

三島の現茨木市沢良宜さわらぎには鎌足の別業べつぎょう（別荘）があり、軽皇子の別邸たかつきしこせべちようは高槻市古曾部町あたりだったと考えられており、鎌足の館からは東北に向かって坂を上ることになるが九キロメートルくらいしか離れていなかった。

脚の痛みで宮に出ていなかった軽王（のちの孝徳天皇。皇極天皇の弟）の別業に、神祇伯を任命されて三島に戻った中臣鎌子（のちの藤原鎌足）が密かにそこに走って、御機嫌伺をしたことで知られている。

そして、茨木市太田にある太田茶臼山古墳のすぐ西側辺りが「中臣大田連」の本貫地と見られているようで、この氏族は中臣氏の男性と太田神社を祭祀した太田氏の女性との婚姻関係から生まれた復姓氏族だとみなされる。

ちなみに、太田茶臼山古墳は宮内庁が継体天皇陵に治定するが、史学会の定説はその東方にある今城塚古墳（高槻市郡家新町ぐんげしんまち）である。また、太田神社の原神は不明で、中臣氏の勢力拡大と共に祖神の天児屋根命が祀られていたのが、アマテラス・スサノオ・トヨウケビメに変えられように思われる。

従って、孝徳天皇崩御後はその辺り一帯が鎌足の支配下に置かれたこと、そして鎌足との関係からしても、天智天皇が百済系氏族によって拓かれた太田の地を大田皇女の養育地にしたことは十分に考えられるだろう。

これに対して、鷗野讚良皇女が養育された鷗野邑との地理的、また共に新羅系豪族との扶養関係から、草壁皇子の名前が草香邑と草壁氏と直結することは疑いようが無いと言えよう。

## （2）草壁皇子と大津皇子の生年

『懐風藻』では大津皇子の方が草壁皇子より先に生まれたとしており、大津の宮で生まれたとする名称からすればその可能性を否定しきれない気がするが、ここでは『紀』の紀年に従うことにする。

「持統紀」に「草壁皇子は天智元年に大津宮で生まれた」とあるので、生年は六六二年である。また大津皇子は、持統天皇から死を賜った六八六年に「時に年二十四」とあるので六六三年の生まれである。

ここから鷗野皇女の懐妊期間は、一カ月〓三十日の当時の暦から単純に、また懐妊後二カ月目の認知として、六六一年四月から六六二年三月の間になる。

ところが、六六一年七月に斉明天皇が筑紫朝倉宮で崩じて、そのために称制した中大兄

皇子（天智天皇）は一時帰郷して、十一月に川原宮で齊明天皇の殯をしている。それには当然、大海人皇子と妃たちは参列していたものと考えられる。

その後は近親者には半年以上の殯と禁欲の期間になるから、鷗野皇女の懐妊は六六一年三月～七月、つまり、大王の征西中から崩御以前に絞られると考えるのが妥当である。そうなると、草壁皇子の難波大津宮での誕生は六六二年一月～四月だったとみなされることになる。

同様の推定で、大田皇女の天津皇子の懐妊期間は六六二年四月～六六三年三月の間で、生年は六六三年三月～一二月になる。従って、天津皇子は草壁皇子より一歳から一歳半程度年下だったが、それ以上は離れていなかったことになる。

そして、ここで見逃してはならないのは、六六三年二月から半島での戦闘が拡大して、八月に倭の船団が白村江で大敗を喫して、それからは全軍の半島及び九州からの撤収・逃避に追われていることである。

その間に大田皇女の懐妊・出産があったことは、征西開始から遠征の失敗までの間に大海人皇子が「九州に滞在していた」証にはならない。征西期間中の大海人皇子の言動は一切不明である。

このような状況が示すのは、天津皇子が難波大津で生まれたという推定と合わせて、飛鳥での齊明天皇の葬儀以降は大海人皇子と大田皇女は飛鳥にいて、殯の終了後に大田皇女は身ごもったということである。

すると、鷗野皇女はどこにいたのか。

——これに対しては、**大海人皇子と鷗野皇女は元から征西に同行せず、飛鳥に留まっていた**、中大兄皇子が短期決戦に向けて筑紫に再度赴いた後に、難波で草壁皇子が生まれたという結論になる。

征西・天皇崩御・覇権の失敗と敗戦という激動の期間中に、大海人皇子の妃たちが九州で皇子をもうけたという見方には全く賛同できないのである。

### （3）大海人皇子が飛鳥に留められた背景

飛鳥に大海人皇子が留まったのは大海人皇子の意志に拠るものでなく、鎌足の建言を受けた中大兄皇子の要請に拠る齊明天皇の詔に従ったものと考えられる。

その表面的で単純な理由は、天皇も太子も不在になる国の都また蘇我氏最大の拠点だった飛鳥を預けられるのが大海人皇子しかいなかったということになるのだろうが、その裏

には様々な事情が隠されていたようである。その推測事項を略記すると、

- ・大海人皇子はどちらかといえば親新羅派であり、百濟派で半島への覇権を狙っていた中大兄皇子と相容れない立場にあり、陣営での二人の対立を避けなければならなかったし、陣営から新羅への情報漏洩を防がなければならなかった。
- ・朝廷には孝徳朝時代から新羅討伐の上申はあったが、征西の目的は百濟救援にした。つまり新羅討伐ではなかったので大海人皇子は反対できなかった。
- ・中大兄皇子は天皇を大海人皇子と一緒に飛鳥に残したくなかったので、天皇を旗印にした出兵によって倭国軍を統一した。

・出産間際の大田皇女は大海人皇子の子を生むことになるので、天皇の孫を先に天皇に見せなければならぬという理由で、大海人皇子の人質として帯同した。その代りに妊娠の兆候がなかった鷗野皇女は飛鳥に残した。

・兄弟皇子による国の東西の分担統治は、二人が協力関係にあった時にはうまく機能した。中大兄皇子が飛鳥に一時帰還後すぐに滞りなく斉明天皇の葬儀を行えたのは、大海人皇子が飛鳥と宮に残された族長らからなる老臣たちと兵を掌握して、的確な指示を出せていたからである。

しかし、これが大海人皇子が東国に基盤を築く最大の要因になり、十年後に、倭国始まって以来最大の争乱事件の結果を左右することになった、と考えられるのである。

そして、半島への物資・兵員の輸送に当って、筑前から老岐・対馬を足掛かりに波が荒い玄海灘を渡るためには、古来その海路を支配して半島情勢も熟知していたはずの宗像氏が用いられて然るべきだったと思われるのだが、実際に將軍に登用された海人族は、安曇氏と阿倍引田氏だった。

大海人皇子を養育したと考えられる大海氏が安曇氏系の海人族だったことに微妙な配慮があったのかもしれないが、大海人皇子が征西に同行していたとすれば、大海人皇子の現地での意見も、高市皇子の父方で大海人皇子と密接な関係があった出雲系の宗像氏の軍での地位も軽視できなかつただろう。しかし、宗像氏の人物は將軍になっておらずその兵たちが参戦した記録も無い。

それが海戦での大敗北につながったとは言えないが、安曇氏と宗像氏の祖につながる尾張氏は、「壬申の乱」で大海人軍に大きな援助を行っている。

「壬申の乱」が大海人皇子の東宮退位以前に計画されていたという説には全く賛同でき

ないが、『紀』に記されないその期間中の大海人皇子の行動が、乱において多豪族の味方を増やす結果を生み出した、とみなせるのである。

その追加考証を以下で行う。

#### (4) 「壬申の乱」の功臣に対する大紫の贈位

「壬申の乱」は、天智天皇が六七一年十二月に崩御したあと、翌六七二年六月に、天智天皇の東宮だったが退位した大海人皇子が近江朝廷に対して反乱軍を起こして、わずか一カ月で勝利した内乱である。

そして、『紀』と『続日本紀』では壬申年之勞、壬申年之役、壬申年(之)功などの語によって死後に贈位された功臣たちが記される。それをまとめたのが末表である。

その考察に入る前に、天武元年について補足しておきたい。――それは、六七二年に起った「壬申の乱」の年を『紀』は天武元年としていることである。

『紀』は、天智天皇から天武天皇への順当な皇位継承を付会した。甥から伯父への皇位の継承ではそこで直系の皇統譜が一回絶たれることになるので、天智天皇の後を継いで称制したとみなされる大友皇子の半年間の治世を無かったことにして、六七二年冬に飛鳥浄見原宮で政り事を始めた、と記したのである。

しかし、明治期に行われた歴史の見直しによって、大友皇子に対して弘文天皇が追諡された。つまり、壬申年に弘文天皇の治世があったと認められたのだが、それにもかかわらず、その年は相変わらず天武元年として扱われている。

天武天皇の即位は「天武紀」二年正月条に記されるが、その末文に、校正時に見落とされたとみなされる「是年也太歳癸酉」の文字がある。また「薬師寺東塔擦銘」(東塔の法輪支柱の下部に残る銘文)の最初に刻まれた「(天武)天皇即位八年庚辰之歳」から逆算される即位年も癸酉になる。従って、天武朝は六七三年に始められたと理解しなければならぬ。

しかし、本論においては敢えて、従来の貴重な学説や多くの識者の論文に従って、六七二年を天武元年として説明また作表したことを断っておく。

また、冠位・位階制度は孝徳期の「冠十三階」から元明期の「大宝令」まで大別すれば三回変わっている。功臣に対する贈位・贈冠の名称も時代によって分かれている。その対比についてはここでは省く。

更に付け加えられて戴ければ、天武天皇も娘婿の大友皇子(弘文天皇)治世の年を残し

たことから、その皇位を篡奪するために「壬申の乱」を始めたとする見方には全く同意できない。『紀』が天智天皇から天武天皇に皇統を穏当に繋ぐために、それよりも更に重大な改竄を行ったこともほぼ見えているが、それについてはここでは触れないことにする。

天武天皇即位後、乱の功臣で最初に薨じたのは坂本財たからで、小紫を贈られた。大織から始まる階位の六番目である。小紫の上が大紫で、天武期（「冠位四十八階」以前）に六名が贈位されている。

坂本財の前、『紀』天武元年十二月条の最後、つまり「壬申の乱」を記した「天武紀」（上）の末文に「是月、大紫韋那公高見薨」と記されている。

威奈氏は猪名、韋那、為奈、偉那などとも書かれるが、高見は第二十八代宣化天皇の皇子で韋那姓の祖になった火焰皇子ほのおのみこの後裔で、摂津国猪名部（尼崎市の北東部）を本拠地にしていたようである。

大紫については、孝徳朝で生存中に大紫を贈られたのは左大臣になった巨勢徳太と右大臣になった大伴長徳ながとこ（馬飼）だけで、天智朝では大伴長徳のあとを継いだ右大臣蘇我連子むらじこ（蘇我赤兄等の異母兄）がいるが、これは死後の贈位だったと考えられる。

一方、韋那公高見は「孝徳紀」（六五〇年）で穴戸国から献上された雉を乗せた輿こしを持って天皇の宮殿まで進んだ猪名公高見とされるが、その後は大友皇子（弘文天皇）の時代まで大紫に任じられるような冠位も事績も記されておらず、「壬申の乱」では弟の磐楯いわずき（石次つぎ）が朝廷側の興兵使（兵の徴収役）にされている。

磐楯は宣化天皇五世の王だったが、山部王や石川王など、他の王が王の称号を付けて記されているのに磐楯は王とされていない。しかも、共に使者になった書葉も忍坂大摩侶も東漢氏の武将で姓は直あただった。従って磐楯は三名の中では長だっただろうが、宮でさほど重要な立場にあったとは思えない。

従って、天智・大友朝で高見が大紫に昇進していた可能性は極めて薄い、と見なければならぬ。それなのに、高見の死亡記事が「壬申の乱」の締めくくりに特筆されていることは、看過できない示唆である。

これについては、大海人皇子から乱に極めて大きな功績があったと認められて、天武朝が始まってすぐに、天皇によって最初に大紫を贈位されたのが高見だった、とみなすべきだろう。

高見は恐らく朝廷にあっては顕著な大海人皇子派であり、大海人皇子派の宮人たちをま



とめる重鎮になり、大海人皇子討伐軍に反対したり乱の早期收拾を目指して働いていて、大海人皇子が勝利したのを見届けてから安心して他界した、と思われるのである。

従って、乱において薬も大摩侶も大海人軍に捕らえながら磐楯だけが宮に逃げ戻れたのは、磐楯が高見の弟だったために逃がされたのかもしれない。

韋那（威奈）公については別の史料がある――。

江戸期のことになるが、摂津に隣接する香芝（奈良県）で発見された威奈真人大村の「骨蔵器」（国宝）の墓誌に、「檜前五百野宮御宇天皇（第二十八代宣化天皇）之四世で後岡本聖朝で紫冠を賜った鏡公之第三子也」と刻まれていたのである。

そのために、国文学者で歌人だった尾山篤二郎氏は鏡公を韋那公高見と同一人物とみなした。（『額田ノ姫王攷』）。つまり高見を宣化天皇四世と見て、その長女を鏡王女、額田姫王を第二、大村を第三子と解釈した。

しかし、鎌足公と淡海公（不平等）が鎌足王や淡海王とされたことが無く、大友王（大友皇子）や葛野王が大友公や葛野公と称されたことが無いように、「皇族や豪族の首長に用いられて諱（名前）に付けられた王」が、「地域名を主に高位の官職者に対する尊称や諡号にされた公（君）」と同時表記されることは無かった。従って、鏡公と高見は別人だった可能性を考慮すべき余地があった。

しかも、銘文に鏡公は紫冠を賜ったとあるので大紫か小紫だったことは間違いないが、稀な大紫だったなら恐らくそう記されただろうから、鏡姫王・額田姫王・大村の父だった鏡公は小紫だったことが十分に考えられる。

また、銘文の「子」はやはり男子と解するべきだと思われるので、このような観点から鏡公（額田鏡王）と高見（王）を別人として高見が鏡公の長子だったとみなせば、磐楯が第二子、大村が第三子になって系譜が成り立ち、銘文と繋がることになる。従って、鏡姫王・額田姫王も、母は不明だが、鏡公の女むすめだったことになる。

更に問題なのは、尾山氏及び殆どの研究者は、銘文中の「後岡本聖朝」を単純に、一般的に後岡本朝が指す斉明天皇時代と解釈しているようだが、これには異論を唱えておきたい。

既に推理したように、高見及び猪名氏一族は斉明・天智・大友朝の時代には朝廷の片隅に追いやられており、高見に紫冠を授けたのは天武天皇である。

「後岡本聖朝紫冠威奈鏡公、（大村は）後清原聖朝初授務広廣肆、藤原聖朝少納言、勤廣肆、正五位云々」は、没落しかかっていた韋那氏を登用してくれた朝廷を「聖朝」として

いることが明らかである。ここからも後岡本聖朝は「天武聖朝」でなければならない。  
 ちなみに、大村が務廣肆むこうし（天武天皇が定めた「冠位四十八階」の諸臣の第三十二位）に取り立てられたのは後清原聖朝（持統朝）、少納言に昇進したのは藤原聖朝（文武朝）という事実である。余計な説明だが、藤原聖朝の藤原は藤原氏ではなく藤原京のことである。そして、後岡本宮について『紀』は記している。――「乱」が終って天武天皇は不破から馬子が造った「嶋宮から岡本宮に移り、その年の終りに岡本宮の南に新しく造った飛鳥浄御原宮で政務を始められた」と。

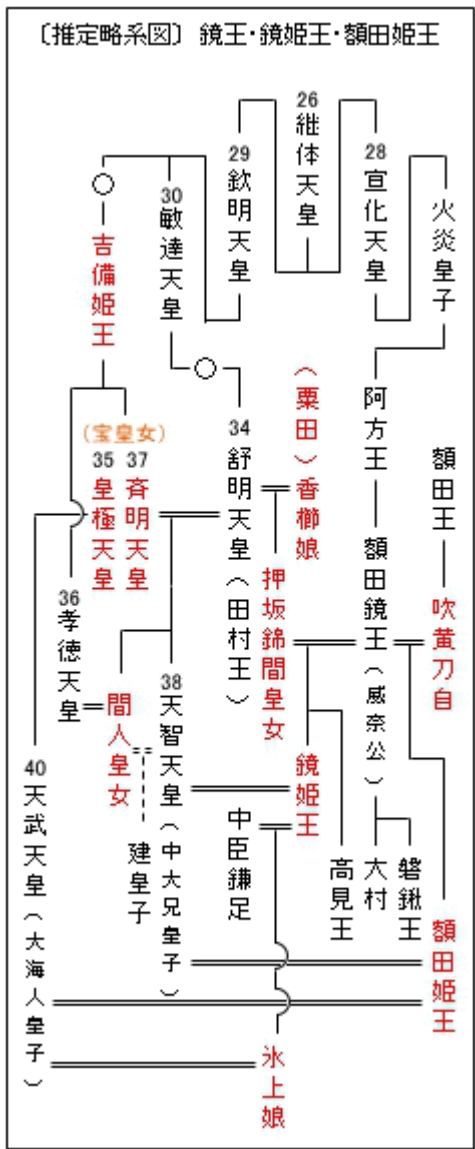
この岡本宮が後岡本宮で、「骨蔵器」の後岡本聖朝である。

岡本宮の始まりは舒明天皇の宮だったが焼けて、そこに建てられたのが斉明天皇の後岡本宮だがそこも焼けて、その跡地に板蓋宮が造られて焼けた。天武天皇はそこに残った建物を仮宮として三カ月間政務を執ってから、その間に拡張整地、造営された飛鳥宮に移ったのである。だから、天武聖朝は後岡本宮が起点だった。

この点からも「骨蔵器」の後岡本聖朝は斉明朝ではなく、この岡本宮、つまり後岡本宮に始まった天武聖朝だったとみなさなければならぬのである。

大村が彫らせた後岡本聖朝はそういう意味だったと推断できるだろう。

本論では紙幅と内容の都合上、ここでは筆者が作成した推定系図のみを示しておく。この内容については稿を改めて説明してご批判を仰ぐつもりである。



(5) 「八色の姓」から見る「壬申の乱」の功臣

猪名公の他、『紀』が主張する天武十三年（六八四年）に定められた「八色の姓」で真人を授かった皇族の末裔たちの多くは、乱で大海人皇子派に加わっていたことが明らかであり、朝臣を授けられた高位の豪族たちの中にも、従軍することなく大海人皇子を支えて

いたと考えられる人物が見られる。

その内の一人が、のちに阿倍氏の宗家になる阿倍普勢（臣←朝臣）御主人<sup>みうし</sup>である。

阿倍氏は孝元天皇の皇子（大彦命）から出た大族で、古くから蘇我氏の側近として各地に勢力を拡大してきた。孝徳朝の左大臣安倍倉梯麻呂が御主人の父で、妹の小足媛<sup>おたらしひめ</sup>は孝徳天皇の妃になって、有間皇子をもうけていた。

ところが、「乙巳の変」によって立てられた孝徳天皇は鎌足かわいさの余り小足媛を鎌足に任せさせた。それは御主人に二人に対する反感を抱かせることになっただろう。

しかしそれだけでなく、孝徳天皇崩御の四年後、鎌足が企てたことが明白な陰謀に従って、斉明天皇が留まる牟婁温泉の手前の山中で中大兄皇子が十九歳の有間皇子を絞首刑に処したのである。有間皇子の側近で鎌足に姻戚関係を解消されたと考えられる塩屋連鯿魚<sup>このしろ</sup>も斬られたが、中大兄皇子派の者たちは出世して征西や乱で将に取り立てられている。

有間皇子は御主人にとって甥であり、将来御主人の有力な味方になるはずだった。御主人の心が更に中大兄皇子から離れたことは想像に難くない。

従って、中大兄皇子が自分に反感を抱いている御主人を征西に同行するはずがなく、その代りに阿倍の支族で御主人の盟友であり、越の国司<sup>えみし</sup>で毛人の討伐で名をはせた阿倍引田比羅夫を船団の将軍として引き連れて行っている。

だから、比羅夫は天智朝において大錦上になり大宰帥<sup>そ</sup>（長官）に任じられた。

一方、御主人の行動は乱のあとまで不明だが、天武朝では中枢に登り直大参に任じられて、天皇崩御の際には最高機関の太政官の諫を述べた。これは、御主人に対して天武天皇が置かなかった大臣相当の役が与えられていたことを明示している。そして、持統期になると乱の功臣として百戸を与えられ、それが持統期中に五百戸まで増えており、大宝三年（七〇三年）に薨じる前には右大臣従二位にまでなっている。

御主人の乱に対する功の内容は不明だが、大伴御行と歩調を合わせるように昇進を重ねた、抜きん出た功臣だったのである。

ここから、征西の時に飛鳥に残された御主人が頼りにできたのは大海人皇子と讚良皇女であり、中大兄皇子と鎌足が留守になった期間が二人を結びつけたものと考えられる。

そして、出陣した形跡が見えない乱の時には、韋那高見や旧皇族また老臣たちと連携を取りながら、宮を退いた大伴氏や留守司（高坂王と坂上老と熊毛）などとの連絡にも一役買ったのかもしれない。

しかし、それよりも可能性が極めて高いのは、大海人皇子が吉野から美濃に逃げる街道

道の安全確保があった、と考えられるのである。

大海人皇子一行が最初に一息ついたのは宇陀（奈良県宇陀市）山中の吾城あきで、そこには大海人皇子の嬪になっていたかじ（木へんに殼）媛娘あつひめの父、穴人大麻呂あなひとの居所があった。

穴人（完人）氏は朝廷で猪や鹿など、鳥獣の肉を調理する穴人部の長で、穴人部の上部組織で朝廷の食膳を司った膳部かしわでを束ねた膳氏と共に、阿倍氏と同祖だった。かじ媛娘は天皇との間に第二皇子になる忍壁皇子おさかべをもうけており、子と共に吉野から実家に立ち寄ったと思われる。

忍壁皇子は第一皇子の高市皇子の異母弟で、第三皇子の草壁皇子の異母兄になる。かじ媛娘また、乱後に第五皇子の磯城皇子しき、さらに二人の皇女をもうけて、天武天皇に最も愛された妻ともされる。

この点から、穴人大麻呂は大海人皇子が東宮であろうがなかるうが、その味方だっただろう。

しかし、当時伊賀はまだ国になっておらず伊勢国の伊賀評（郡）だったが、大海人皇子一行が少人数で足を踏み入れる宇陀郡の先のそこは、道中最大の危険地域だった。

伊賀は時の大友天皇の母（伊賀采女宅子やかこ）の出身地であり、畿内国と伊勢国の境になる街道最大の集落、名張は朝廷派の名張氏が抑えていた。ところが、そこでは名張氏が既に排除されていて、大海人皇子一行の通過に朝廷側の妨害も抵抗もなく、伊賀郡では郡司たち的大海人皇子の一行に加わった。

翌朝一行が達したのは阿閉氏の本拠地、美濃を目前にした阿拝郡あへで、そこを過ぎたあとに朝廷から抜け出した高市皇子と再会することになった。ちなみに、阿拝郡は草壁皇子の妃で文武天皇の母になった元明天皇（阿閉皇女あへのひめみこ）の乳母の里でもあったと言われているので、持統天皇との縁も深かったことになる。

伊賀市一之宮に残る敢國神社あえくにの祭神は大彦命で、社伝によれば創建は六五八年（斉明四年）である。つまり穴人氏・膳氏だけでなく、阿拝氏・敢氏も更に伊賀臣も、阿倍氏と同族だったのである。

大海人皇子一行の吉野宮からの逃避は、本来なら紀から三宅石床が守（国司。死後大錦下）で田中足麻呂（死後直広老）が湯朴令をしていた伊勢、尾張、信濃を回って美濃に行くのが安全な道だったはずである。しかし、実際は誰しもが危険と思ったであろう最短ルートルートを最短日程で抜けた。

その行動の中で最大の難所だった伊賀を無事に通れただけでなく、その間に獵師や兵士

が集まってきて、小規模ながら軍の体裁を整えることができた裏には、畿内国の東部から伊勢国の西北部を拠点にしていた阿倍枝族のきめ細かな連絡網と支援があった、その指示の出所が阿倍御主人だった、と考えられるのである。

阿倍御主人による伊賀の豪族たちの抑え込みや協力の命令が無ければ、大海人皇子は美濃に抜けられず、天武天皇は生まれなかっただろうし、それ以前に、中臣金など反大海人皇子派の朝廷の重臣たちの圧迫がなければ、大海人皇子は吉野宮から動かなかった可能性が高いから、これらが天武天皇を生んだ直接的な要因だったとも言える。

それに、乱には紀臣阿閉麻呂という、美濃の本陣から大伴吹負に対して送られた援軍の将軍が登場する。しかし、吉野宮出立時にはいなかったから、途中から大海人軍に加わった、ということになる。そして、死後（天武二年）「在伊賀國」伊賀にいて大紫を贈られている。老齢で退官していたと思われるが、公式には天皇即位後最初の大紫である。

阿閉麻呂という名が阿閉氏との関係を窺わせ、最後に伊賀に居住していたことから、ここが生地で、伊賀で大海人軍に加わったことが想定される。

しかし、本拠地とした倭の桜井から陸奥あたりまで強大な武力も要していた阿倍氏の本隊は、乱において朝廷側にも大海人側にも出動した形跡が見られない。阿倍氏が朝廷軍に加わらなかったことだけで大海人皇子には大きな支援になっただろうが、そこには勝者が決まるまで自分直属の一族の分断を許さずに動かなかった、御主人の慎重で冷徹、またしたたかな読みもあつたように思われるのである。

蘇我氏の同族だった紀氏に関連してもう一人、天武期に姓は臣から朝臣になり、七〇五年薨去時に正三位を贈られた紀大人（うし）がいる。

天智・大友朝では御史大夫（ぎよしたいふ）という大臣に次ぐ高官で、天智天皇に対して忠誠を誓った人物である。征西の時には中大兄皇子の腹心として、大海人皇子の見張り役として飛鳥に残ったものと思われる。

しかし、乱の記事には登場せずその後登用されている。これは、大人が乱の発生と終結時には大海人皇子側に内通しており、同族の阿閉麻呂らと密かに連絡を取り合い、朝廷内部から朝廷軍の詳細な情報を流していた可能性を示している。

ちなみに、蘇我系三十四氏の内、朝臣姓を授けられたのは紀氏等二十氏だから、既に蘇我氏に吸収されていたと考えられる葛城氏を含む他の十四氏は、大海人皇子に背いたか乱に功績が無かったか、或いは「八色の姓」制定時に天武朝で役に立ちそうな人物がいないと判定された、とみなさざるを得ない。

征西は多くの氏族を分断した。そして、同行した者たちの殆どは天智朝でも乱でも朝廷を守る側に立った。しかし、乱では彼らと袂を分かった同族・枝族たち、行動・功績明だが「八色の姓」で取り上げられた圧倒的多数の氏族が大海人側に付いた。天智天皇側からすれば、いずれ退位させるつもりだっただろうが、大海人皇子を東宮にしたことが大失敗の元だったと言えるかもしれない。

前項と本項の分析が示すのは、繰り返すことになるが、征西の間に飛鳥に残された戦場に向かず政権や施政に不満を持つ旧皇族、若年や族長級の臣たちが大海人皇子に近づいて親交を深めることから大海人皇子の人柄や姿勢が見直されて、乱で大海人皇子を擁立する下地を形成したことである。

その背景には、大海人皇子の皇位を嗣ぐに相応しい血統、征西期間中の飛鳥と東国の管理と臣下との交流、そして征西失敗後には唐と新羅に対する対応を含めた東宮時代の成果が加わり、近江遷都後は遷都に反対だった勢力も巻き込んだことが推測される。

大友天皇は国を安らかにしたいと望んでいた。しかし、旧天智派の重臣たちに操られていた。

大友皇子が太政大臣になっても思うように国を動かせなかった悔しさは、『懐風藻』第一番の後半部の「述懐」に「羞無藍撫術 安能望四海」（自分に臣下を治める術が無いことを羞じる どうすれば穏やかな四海（天下）を見ることができなのか）に切々と述べられている。

大海人皇子は当初、左大臣蘇我赤兄、右大臣中臣金を筆頭とする強硬派の悪害を絶って大友天皇を助けることを当初の目的として、つまり政権転覆や皇位篡奪の意図は無かったのに、乱に立ち上がった。僧としても朝廷に戻れば、皇位を大友天皇から自分と天智天皇の孫になる葛野王（当時四歳）につなげると思っていたように思われる。ところが、自分の無力さを悟った大友天皇が自殺をってしまった。

大友天皇には、自分が命を絶つことによって乱を終結して、悪臣を排除して国を治められる義父にあとを任せたいという、悲壮な読みと覚悟があったのだろう。

結果、大海人皇子は乱の功臣たちの強い推挙と讚良皇女の草壁皇子を天皇にしたいという強い願いがあつて、天皇に立つことになった。

そのために、『紀』は大友天皇の治世を抹殺して天智天皇から天武天皇に皇統譜を繋いだ。

——蛇足だが、これが「壬申の乱」の発端と終焉に対する私見の粗筋である。これを逆に辿ってゆけば、大海人皇子が中大兄皇子（天智天皇）の側で鎌足と共に飛鳥で国政に加わっていた間は、多くの有力氏族を従える時間的・精神的な余裕は無かったものと考えなければならぬだろう。

従って、その期間の大海人皇子の飛鳥における威信構築が原動力にならなければ、「壬申の乱」は成功しなかったし功臣も生まれなかった、と言えるのである。

大海人皇子が諸臣からなぜそこまでの信頼と期待を寄せられたのか、そこには別の大きな動機と謎があるが、これについては本論では触れていないのでご了承いただきたい。

最後に、「壬申の乱」に関係したと思われる人物の行賞と死後贈位を本論提出者がまとめた表を提示しておく。前掲の推定略系図と共に無断転載はお断りしたい。





- 【参考文献】（順不動・敬称略）
- 『日本書紀 下』井上光貞監訳（昭和63年 中央公論社）
  - 『古事記・日本書紀』福永武彦訳（昭和52年 河出書房新社）
  - 『続日本紀（上）』全現代語訳『宇治谷孟（1996年 講談社）
  - 『額田ノ姫王攷』尾山篤二郎（『萬葉集大成』9 作家研究篇 上 昭和28年 平凡社）

【インターネット資料】（順不動・敬称略）

- 「大阪湾環境データベース」大阪湾の歴史」国土交通省
- 「水都大阪」水都大阪の歴史」古代大阪の変遷」水都大阪コンソーシアム
- 「堺から日本へ！世界へ！」堺の名前起源」堺市博物館
- 「播磨風土記」国文学研究資料館
- 「神皇正統記」国立国会図書館デジタルコレクション
- 「本朝皇胤紹運録」国文学研究資料館
- 「古典研究サイト 埋れ木」（上代古典集）田中 孝顕
- 「古代史類纂 列島編」（上宮聖徳法王帝説・上宮聖徳太子傳補闕記）
- 「日本書紀の漢字類義語に関する研究」尊称を中心に」朴 美賢
- 「研究 額田王に関する一考察」有村 和子
- 「額田王覚書」歌人額田王誕生の基盤と額田メモの採録」吉井 巖（萬葉学会「萬葉」第五十三號昭和三十九年 三三〇～五一頁 万葉學會）
- 「社会実情データ図録」日本人の寿命の変遷（「寿命図鑑」2016年いろは出版引用）
- 「薬師寺縁起」東京国立博物館デジタルライブラリー
- 「壬申の「乱」と万葉集」金井清一
- 「天武天皇の年齢研究」神谷 政行
- 「和暦（わごよみ）」と中華歴（からごよみ）」
- 「Wikipedia」日本語版
- 「GoogleMap」

「地理院地図（電子国土Web）」国土地理院